



第230號 (第 20 卷)

(昭和15年) 6 月 號

巻頭

教養としての天文学

隨筆

山 本 一 清

(さき頃、關西學院大學新聞の編輯部に頼まれて書いたものです:)

バイブルの第一ページから最終頁に至るまで、天文学の記事で満ちてゐます。其れを知らない人々が多いものだから、天文をぬきにして、人間くさい註釋ばかりすることにより、人の興味を殺ぐのです。

一體、天文学が最古の理學であるといふことは、其れだけ、萬人向きの學問である意味なのです。世人は“天文学は役に立たない學問だ”と言ひます。之れは、言ひ換へれば、天文学は教養の學問だといふ意味なのです。物理學や化學に比して、天文学は人生の物資生活には比較的に縁が遠いかも知れません。

(時計や曆法の問題、又、航空や航海、軍事、地理、歴史など、天文学の直接關係する方面は多いのですが。) しかし、哲學や宗教や、一般の藝術が、人の衣食の生活に關係のない、“役に立たないものだ”といふのと同じ意味に於いて、天文学は“役に立たない”のです。誰も、文學や音樂や繪畫、彫刻が人生に不必要なものだと言ひ切る勇氣はありますまい。それと同様に、天文学は物質以上の人間生活に於いて、殊に、精神的な人生のために、大きい使命があるのです。

世に有りとあらゆる宗教の中で、天文学を素材としない(或は、天文学を利用してゐない)ものがありませうか? キリスト教も、ユダヤ教も、佛教も、マホメト教も——天理教や大本教などでさへ、天文学説を、必ず其の中に採り入れてゐます。歐米各國の神學校には必ず天文学が教へられます。天地宇宙の構造と其の支配者の意圖を知らないでは、人に道を説く資格は無いのです。

天文学は、人に信念の根據と、理念の強さを教へ、目前の些事を超越して、大宇宙の進展途上の展望を與へます。人を友とするよりも宇宙支配者を友とする心境を教へ、又、國家社會の理想と進歩との行路に光を與へます。我が日本の國體も、天文学的な深い意味を有つてゐます。

天文学は、又、眞理と美の本統の姿を吾人に示します。昔から、どこ國で

も、天文学の研究法は、真理探究のモデルです。例へば天文学は三千年の昔から、論理と数学とを其の研究上の武器として使用してゐます。この天文学を模倣して三百年以前から物理学が数学や論理学を用ゐ始め、近代には又、化学や地質学や、生物学に至るまで、同様な方式を用ゐるやうになりました。神学や哲学も近い将来には天文学の先例に習ひませう。

世界の美術は、中世に於いて（或は、それ以前から）西洋ではキリスト教が原動力となり、又、東亞に於ては佛教が推進力となつたかの觀がありますが、しかし、吾々から見ると、美術は、東西共に、其の背景に天文学を有つてゐます。ミケランゼロの一二の作を一見しただけでも其れは感得し得ます。ギリシヤやローマの美術は言ふに及ばず、遠くエジプトやバビロンの遺物も天文学無しには解けません。

尤も、天文学が現代のやうに硬化して了つて、一般民衆に忘れられかけてゐるについては、天文学者の責任も多くあると思ひます。天文学を全く“宇宙の物理学”に墮落させて了ひ、只、物質的方面へのみ進みつゝあるのは、學術のためにも、社會の教養のためにも大脱線と言はなければなりません。——之れについては、（特に我が日本に於いて）天文学の教程を改め、小學にも、中學にも、天文教材を加へ、兒童の宇宙への憧憬を正しく導き、完全人格の發達を期待しなければなりません。

試みに、日曜學校などで、教師が天文学に關して多少の素養を有ち、其れを以つて、宗教訓話の中に加へて導くならば、兒童は驚くばかりに引きつけられ、人生の（或は、宇宙の）大きい明る味に眼を見開くことが屢々見られます。

（關西學院新聞より）

メキシコの沖合で七十五年來の金環食

（メキシコ西方洋上清澄丸船上にて【八日】高田大毎特派員發）メキシコ西北部バハ・カリフォニヤ沖合を航行中の清澄丸は去る四月七日午後殆ど完全に近い金環食の珍景に遭遇し、船客も乗組員も3時間近く甲板で宇宙の一大奇觀を心ゆくまで眺めることが出来た。

これは西半球では75年來の金環食であるが、メキシコ沖合60マイル、北緯25度27分、西經113度15分の點に清澄丸が差かゝつた時、拭つたやうな青空が突然うすぽけると見る間に、午後1時ごろから肉眼にもはつきりと太陽が缺け初め、記者（高田特派員）と久保一等運轉士、小野事務長がこの奇現象を40枚のフィルムに記録する間に、とうとう金環を残して皆既食を完成、金の指輪そのまゝの輪がうす暗い中天に輝いて、言語に絶する美觀である。時に7日午後2時（日本時間8日午前6時）。ほんの一部分だけ輪の缺けた殆ど完全に近い環狀となり、その輪が漸次左に廻轉するかの如く見られ、輪の一方が段々太くなり日月形に移つて、午後3時50分完全に元の太陽にかへつた。本庄船長はかうと前からわかつてゐたら日本の天文學者に乗船を奨めればよかつたのにと残念がつてゐた。西半球で再び金環食を見ることが出来るのは54年後といふことになつてゐる。